

ひらか 連携ニュース

先月、横手市地域包括支援センター主催の「多職種連携研修会」に参加いたしました。この会は、横手市の在宅医療・介護連携推進事業の一環として、横手医師会、県南地区介護支援専門員協会の共催により開催されています。今年で2回目となりますが、当日は240名が参加し、多職種がそれぞれの立場で、日々の在宅療養支援における問題や想いを語り合いました。今回は、研修会での話題や参加者の感想をご紹介します。

横手市地域包括支援センター主催

多職種連携研修会に参加して

日時：平成29年2月21日(火)18:30~20:00
 場所：横手セントラルホテル「翔光の間」
 テーマ：「続・多職種連携はおもしろい！」
 対象：横手市内の在宅医療・介護に携わる
 全ての職種



プログラム



- ・ 話題提供
 「退院時の連携支援事例」
 市立横手病院 医療相談室 石山 博幸氏
 「施設での看取りについて」
 横手市医師会副会長 曾根 純之先生
- ・ 意見交換・エール交換
 グループワーク
 「事例をもとに自分だったらどう動くだろう」

今回の研修会には、当院の看護部、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、医療福祉相談室、地域医療連携室から、計9名が参加しました。

話題提供では、市立横手病院MSWの石山氏から退院支援のプロセスや、老々世帯の80代男性で在宅中心静脈栄養法を受ける患者さんの退院支援の実際について報告がありました。また、横手市医師会副会長の曾根先生からは、入所施設と退院日が決まった状態で、急性期病院から退院直前にかかりつけ医の依頼があり、患者の全身状態が不良で対応に難渋したケースについて問題提起がありました。この他、横手市内の施設へ実施した看取りに関するアンケート結果の報告がありました。市内の特養、老健、ショートステイ、グループホーム、有料老人ホーム等、24の施設で看取りを行っていることや、看取りができない理由として「介護職員の精神的負担や知識不足」「看護職員の不足」「主治医の夜間・休日の連絡の問題」等が挙げられていることがわかりました。

グループワーク後の意見発表では、「院内連携が重要」「入院早期の多職種カンファレンスで今後の方向性を決めることが大切」「施設職員を対象とした看取りの研修会を開催したらよいのでは?」「急性期病院にレスパイト入院を受け入れてほしい」等の意見が挙げられました。

今回の研修会での学びや出会いを活かし、患者・家族が安心して在宅療養生活を継続できるよう、また地域の先生方や在宅スタッフが、必要な情報をタイムリーに収集し、万全な支援体制を整えられるよう、医療・介護連携を強化していきたいと思えます。

当院の参加者の感想

- ・ 顔を合わせて話をする中で、お互いの理解につながり、いい研修会だった。
- ・ 多職種が各々の視点から問題の抽出や意見の擦り合わせを行い、ゴールを目指すこと、連携の大切さを再認識できた。
- ・ スムーズな退院支援のために、看護師が患者さん側と医療者側の在宅における考え方のギャップを埋める関わり方をもっとしていけたらいいと思った。
- ・ 患者・家族が安心して在宅で生活していくために各職種の強みを最大限に活かし、連携を図っていかねばならないと感じた。
- ・ 病院から地域へつなぐタイミングや病期などの見極めが難しいと感じた。

